

古着 d e ワクチン、県内でも広がり 開発途上国の接種を支援



「古着 d e ワクチン」の取り組みで活用される富士電子の社服。
開発途上国のワクチン接種などを支える＝山形市・同社

古着を送り、開発途上国のポリオワクチン接種などの支援につなげる「古着 d e ワクチン」の取り組みが、県内で広がっている。サッカー J2・モンテディオ山形がサポーターに呼びかけて実施したほか、SDGs（持続可能な開発目標）達成に協力的な企業の関心も高い。電子機器製造の富士電子（山形市）は社服のリニューアルを機に、古い社服を送ることにした。

「古着 d e ワクチン」の事業は2010年に始まり、現在は日本リユースシステム（東京）と認定 NPO 法人「世界の子どもにワクチンを 日本委員会（JCV）」（東京）が共同運営している。重さ30キロまで入る専用回収キット（袋）を1袋3300円（送料込み）で購入すると、1袋につき5人分のワクチン代が JCV に届く仕組み。ミャンマーやラオスなどのワクチン接種に役立てられる。

集まった古着は開発途上国で販売され、現地の雇用やビジネス創出につながっている。カンボジアに今春、直営店がオープンし、同店から他国にも輸出。企業の制服や作業着も活用されている。

県内では、モンテディオ山形が今年5月のホームゲームの際、対戦相手の大分トリニータと合同でサポーターに呼びかけ、258人の協力で34袋分を購入。山形丸魚（天童市）も SDGs の取り組みの一環で参加した。

富士電子は、作業着などのデザイン一新を機に古い社服の活用方法を模索し、未使用を含む713着を集めて9袋を購入した。同社の高橋雅之社長は「社名の刺しゅう入りで廃棄しかないと考えたが、SDGs を推進できる資源になった。少しでも貢献できればうれしい」と話している。

【メモ】古着 d e ワクチンの活動は全国に拡大し、今年8月末現在の累計でワクチン寄付数約439万人分、衣類再利用数3659万着分。1袋に約100着が入り、指定の事業所に連絡し、集荷する。衣類のほか、バッグや靴、帽子、アクセサリなども対象。ジャパン SDGs アワード特別賞（SDGs パートナーシップ賞）などを受賞。